

1982年は部分日食が4回と皆既月食が3回起る年

山口 正 博

1982年(昭和57年)は1年間に日食が4回、月食が3回、合計で7回の食現象が起ります。もちろん地球全体に対しての事で、東京とかパリなど特定の地点では必ずしもこのようになりません。20世紀(今世紀)は食現象が7回の年が3度あり、1917年(大正6年)に日食が4回月食が3回、1935年(昭和10年)に日食が5回月食が2回起り、今年が20世紀で最終の3度目に相当します。1982年は次の表の順序で7回の食が起ります。

日付と曜日	時刻(J.S.T)	食の種類	最大食分	見える主要な地域
[1] 1月10日(日)	4 ^h 57 ^m 9 ^s 0	皆既月食	1.336	日本、アフリカ、ヨーロッパ
[2] 1月25日(月)	13 ^h 21 ^m 2 ^s 9	部分日食	0.566	南極大陸、ニュージーランド
[3] 6月21日(月)	20 ^h 51 ^m 33 ^s 7	部分日食	0.617	アフリカ南端
[4] 7月6日(火)	16 ^h 30 ^m 54 ^s 1	皆既月食	1.722	南北アメリカ、オーストラリア
[5] 7月21日(水)	3 ^h 30 ^m 4 ^s 3	部分日食	0.465	北極海沿岸 グリーンランド
[6] 12月15日(水)	18 ^h 10 ^m 56 ^s 9	部分日食	0.736	ヨーロッパ、アフリカ東北端
[7] 12月30日(木)	20 ^h 30 ^m 6 ^s 1	皆既月食	1.188	日本、太平洋、北アメリカ西部

ここで時刻はすべて日本標準時(J.S.T.=UT+9^h)で示し、日食は赤経の合、月食は赤経の衝を表わしています。これらのうち[1]1月10日(日)の早暁の皆既月食と[7]12月30日(木)のよいの皆既月食の2つは日本全国各地から見られます。しかし[4]7月6日(火)の皆既月食は夏の昼過ぎに起ってしまい、小笠原群島東部および付近海面で月出帯食となり、かけ終りが見えるだけで、日本内地では半影食の終るころ月の出となり見られません。しかもこの皆既月食は皆既の最大食の時に月の中心と地球の本影の中心がほとんど一致する「中心皆既月食」と名付けてもよい月食で、1982年に起る3回の皆既月食のうちでは皆既の継続時間が最も長く1時間46分余にもなります。これだけが日本内地で見られないのは仕方がないが残念な事です。このように長い皆既月食は、過去には1953年7月26日(日)のよいと1971年8月7日(土)の早暁に起りました。未来では2000年7月16日(日)のよいに起ります。また日食は4回も起りますが、すべて地球の南極または北極の付近で起る部分日食となり、いずれも日本からは見られません。7月6日(火)の皆既月食の直前と直後の朔に日食が起る事に注意してください。

終りに1年間に日食と月食が合計7回起る年を過去から未来にわたり探してみましょ。これには、次の2種類の型があります。

(1) 日食が4回、月食が3回起る年

65, 112, 177, 242, 372, 586, 698, 763, 828, 893, 958, 1219, 1284, 1349, 1414, 1479, 1591, 1656, 1787, 1917, 1982, 2094, 2159

(2) 日食が 5 回、月食が 2 回起る年

18, 83, 148, 604, 669, 734, 1255, 1805, 1935, 2485

これで見ると、日食が 4 回、月食が 3 回起る年のほうが、日食が 5 回、月食が 2 回起る年よりも多い事がわかります。しかし日食が 4 回、月食が 3 回起る年は 1982 年の次は 2094 年まで、112 年間起りません。また日食が 5 回、月食が 2 回起る年は 1935 年の次は 2485 年まで実に 550 年間も起りません。いずれにしても日食が 4 回、月食が 3 回と日食と月食が合計 7 回起る 1982 年は、われわれの一生に 1 度しかめぐって来ない貴重な日食と月食が多い年といえます。